

俳句随想 〔三百三十三〕

汀子

虚子没後五十年の記念に開催された横浜の近代文学館での展示の図録に、稲畑廣太郎執筆の「虚子の俳壇復帰」に大正二年一月号の「高札」が載っている。誌友に見て欲しい。

一、虚子全力を傾注する事 虚子即ホトトギスと心得居る事
一、号を重ねる毎に改善を試むる事 ゆくゆくは完備せる文学雑誌とする事

一、新年号の外は如何なる事情あるも定価を動かさざる事 漫に定価を動かすは罪悪と心得居る事

一、毎号虚子若くは大家の小説一篇を掲載する事 これ大正二年より新計画の事。大家の原稿を請ふ場合には乏しき経費のうちより原稿料をしばり出す事

一、写生文壇を率ゐて慕進する事 このうちより専門家、非専門家の文豪を輩出せしむる事

一、平明にして余韻ある俳句を鼓吹する事 新傾向句に反対する事
一、平成二十一年三月一日 関西野分会

旬日記

汀子

平成二十一年三月一日 関西野分会

青空をとり戻したる蒲公英よ
東京の春寒逃れ来し如く
雛飾り家居の心取り戻す
たんぼぼにはじまつてぬし野の目覚め

三月一日 下萌旬会

春の雪降りし東京語らばや
下萌ゆる大地これより風を呼ぶ
お汁粉の配られしより雛の客
いぬふぐり太陽雲を退けて

三月二日 ロイヤル俳壇

家居して春めく思ひ自ら
春めくや予定後からついて来る
蛇穴を出づる陽気と思はねど
春めくと思ひし昨日失せし朝
大役を一つ終へ春一歩づつ
積らざる都心の春の雪とこそ
みよし野の消息問ふも西行忌

三月十日 綿業倶楽部

麗かや講演一つ終へしこと
まだ風の素通りなりし柳の芽
計画は着々なりし麗かに

三月十二日 清交社

店閉めて土筆の原の残さるる
見えて来し土筆野の果なかりけり
稿値を積み春塵を置き初むる
雲雀野に声をとどめし雲一つ

一步より雲雀の声をふりかぶる
又次える会への準備春めきぬ
聞こえくる花の消息逃さずに
三月十三日 工業倶楽部

如月の空の変わり目旅にあり
雨に発ち来て如月の晴に着く
春雷を無事に抜けたる空の旅
ここに雛確かに飾りありし筈
三月十四日 関東ホトトギス俳句大会前日旬会

春寒に加はる風の荒さかな
木の芽風こんな荒きこともあり
青空となりゆく早さ春疾風
三月十五日 関東ホトトギス俳句大会

雪解川ここに迫りてぬし奈落
ふと覚めて残雪の景失へり
三月十五日 関東ホトトギス同人会

春の雪気づきてよりの止む早さ
どの景も雪の名残を置ける溪
三月十六日 アサヒカルチャー

旅終へし歸路は別々にて臘
残雪の旅路はけきものとなる
旅終へて又逢ふ仲間春めきぬ
三月十七日 有恒俳句会

蒼く澄む溪流腫なる旅路
湖北より届く消息諸子かな
みよし野の花の消息問ふばかり
春の草にも一枚の空のあり

三月十七日 無名会

明らかに進む季節やお水取
残雪の旅と家居のはざまかな
蛇穴を出でてその家の主となる

旅予定ありたる花の遅速かな
穴を出しほかりの蛇と気づかずに
旅疲れ消えて鹿の家居かな
三月十八日 夏潮旬会

快晴といふ初花に出逢あり
暖かし庭に出ぬ人なかりけり
みよし野の花の見頃に組む旅路
旬日の黄砂沈めて濁る池
この陽気一気に花をいざなへり
旅疲れ快きとも花の屋

草臘野球の結果問ふまじく
三月二十六日 きんぎょ会

計画の半ば如月過ぎゆける
まなざしを合はせたるより雛の客
春の雪もう青空となる都心
強東風の中着陸態勢に
雛に留守頼みし旅のいくそたび

三月二十七日 時雨旬会

山笑ひ季節後からついて来る
鯢鮠ありし仕事の手順山笑ふ
締切を忘れてしをりぬ山笑ふ
青空を隠しきれざる花ミモザ
目的地ミモザの花の道標

帰り来し若者のあて畑を打つ
競ふ色ここにはなくて花ミモザ
三月二十八日 句会と講演の会(於横浜)

三月二十九日 野分会

旅疲れ又は寝不足二日灸
たんぼぼの野の明るさに未来置く

廣太郎句帳

廣太郎

三月八日 虚子記念文学館俳句

俳磚を確かめに蟻穴を出づ

三月九日 朝日カルチャー若草句会

火の山に春雷怒りをさめけり

春雷に突つ込んでゆく西の旅

虚子庵のつらく椿百二百

三月十二日 土筆会

蝮の道二十世紀を引き摺れり

捨て置かれすておかれ春田となれり

昨日より五糶二耗蝮の道

江戸の世の労苦を偲ぶ春田かな

三月十四、十五日 関東ホトトギス同人会 大会

鈍行のやうな特急山笑ふ

虚子も又平家の裔や里うらら

霞より現はれて来し平家の世

残雪といふ標高差ありにけり

三月十六日 「俳句研究」 出句

新宿の道に迷ひて薄暑かな

間違へて降りれば神田祭かな

短夜や本気にしたる君の嘘

斑猫に教へられたる句碑一基

その先はビール一杯飲んでから

三月十七日 草木瓜会

星を恋ふ土筆の丈でありにけり

一本といふ土筆野のプレリユード

六甲の山笑へば館に人溢れ

泣き笑ひ人生を山笑ひけり

笑ふ山よりミサイルの打ち上がる

三月十九日 登高会

若鮎やここより湖西線の旅

五十鈴川手を浸すより伊勢参

鯉動き出すより春の水となる

雨水も水道水も春の水

三月二十四日 若水句会

蘆の角スベースシャトル狙ふかに

みちのくに偲ぶ人あり雁供養

蜆汁好つきやねん巨人は嫌ひ

おくりびとおくられびとに雁供養

三月二十五日 目黒学園句会

領事館ありし寺とや常楽会

水温む此岸彼岸を近付けて

黄沙降る四千年の歴史秘め

涅槃図に人間小さく佇めり

霾に地球締めつけられてをり

三月二十七日 カトリック新聞選者吟

春灯下先づ福音書開くより

三月二十八日 ホトトギス社句会

ひらひらと若布干されてゆきにけり

平成二十一年三月三日 百夜句会

水温む対岸までを近付けて

立子忌の空紫に暮れ初むる

日の本を諦めて蛇穴を出づ

雛納君との過去も納めけり

三月四日 一水会

さんしよのめ椀香るより昼餉かな

白銀の野を引き締めて春めける

三月五日 蕉心会

猫の恋とはこの路地にあの屋根に

何もかも臆なればと思ふ時

猫の恋又失敗をしてる僕

橋突き抜けてつきぬけて水温む

水温むより大川の流れ急

春風に波に向うて船遅々と

三月七日 明石の春を詠む吟行俳句会

地虫出づ城主のやうな顔をして

雑詠

廣太郎 選

行秋のものみな違ふ影をもち 八尾 岩垣子鹿
 蓼萸を獲物のごとく曳きずれる 同
 空といふ青い帽子で歩く秋 同
 鳥渡る水の匂ひを辿るかに 同 山下美典
 啄木鳥の音を捉へし木の高さ 同
 鳶小春気流巧みに捉へつつ 同 東京 今井千鶴子
 肌寒のなほ仮住に馴れぬまま 同
 深秋や時の流れに従ひて 同
 その墓にうすく日当り一茶の忌 同 袋井 湖東紀子
 目が拾ひ指が拾ひし木の実かな 同
 存在を引きずつてゆく穴まどひ 同
 行秋や大河は惜しみなく光り 同
 杉燃ゆる香より火祭始まりし 同 神戸 藤井啓子
 火祭のために暮れゆく鞍馬かな 同
 火祭や火の粉浴びたく恐ろしく 同
 魯田の詮無き勢ひなりしかな 同 香川 湯川 雅
 水上に鳩の浮沈の入れ替る 同
 纏ふより身に入む風の痛みかな 同

草雲雀聞く近しとも遠しとも 神戸 立村霜衣
 いせ道もはせ道もなだらかに冬 同
 冬晴の真中の真下石舞台 同
 椿実となる密かにも確かにも 龍ヶ崎 今橋真理子
 末枯や移るひ易き日を集め 同
 冬薔薇のくれなゐ深めゆく蒼 同
 一人居の京の夜寒でありしかな 京都 安原 葉
 一法会済みし峰寺秋深し 同
 三冊目句集世に問ふ年尾の忌 同
 巻頭誌仏壇に在り根深汁 同 同 浅井青陽子
 小城下の暮しに馴れて秋天下 同
 深秋の書写の山路を辿る旅 同
 三冊子さらさら読めて老夜長 福山 竹下陶子
 黒潮に湧き金風となりにけり 同
 木の実落つ音心頭をころがれる 同
 蛇穴に入りたる地球廻りをり 徳島 岩田公次
 世に打つて出ること無し温め酒 同
 女郎花より女郎花まで花野 同
 茶畑の葉に沈み咲く花白し 熱海 嶋田一步
 整然の中の点々お茶の花 同
 花アロエ力の限り出して咲く 同
 秋日傘ひとつ遠くの帆のやうに 熊本 岩岡中正
 風の鹿おどろき易き足もてり 同
 蔦紅葉神も粧ひたまひけり 同

雑詠句評（二月号より）

一 歩・くに彦・しげ人

仁 義・暮 潮・昭 代

弘 子・純 也・雅

比奈夫・廣太郎郎

草市の手にして軽きものばかり 熊本 岩岡中正

盆祭に使う蓮の葉や芋殻、そして供える草花などを売る市で盆の市とも言う草市である。その売っている物は他の市とは違って殆ど軽いものばかりであった。見た目だけでなく手にとってみても軽いものばかりであると言っているのである。まことに平明に出来上がっている句であるが、その余韻はいろいろと想像されて大きい。「平明にして余韻ある句」として私はこのような句が好きであり、見事な句であると思うのである。（一步）

歳時記の傍題には「盆の市」とあるように、盆の行事に使う草類の市が、季節になると立つ。筆者は京都で八月に見たが、暑い中テントを張って商っており、それこそ草いきれでむんむんしていたのを思い出す。実際軽いものが多いが、作者の「軽いもの」という表現にしみじみとした忌心を感じる。（廣太郎）

ちよつと見め間にヨット増えヨット減り 熱海 嶋田摩耶子

ヨットと言えば動力は風である。風ななければどうにもならないのであるが、少しの風でも読み取ってこそセーリングの腕の見せどころである。色とりどりの三角の帆に風をはらませて行く様は爽快であり壯観である。掲句は洋上であろうか。その景の中から増減に着目して切り取った一コマは、紺碧の海原に船体を傾けて走る数多のヨットの姿が伝わってくる。（くに彦）

それほど大きくないヨットを想像するが、ヨットハーバーから海原へ出帆して行く。風を加減で、帆をいろいろな角度にして、その技量がヨットマンには問われるのである。物理的に増えたり減ったり、というよりはヨットの躍動感が伝わってくる。岸で見ている作者の視点が確かである。（廣太郎）

（以下略）

天地有情

江子選

石路咲いて来て年尾忌の近づきし 熱海 嶋田 一步
 石路の花思ひ年尾忌思ひ病む 同
 教会のステンダグラス秋日濃し 島原 平尾 圭太
 枯葉積むオランダ坂のV字溝 同
 句心は霧の都心を抜けてより 東京 稲畑 廣太郎
 虚子踏みし足跡辿り山の秋 同
 深秋や虚子のひとことひとことに 同 今井 千鶴子
 今朝の冬新居成らむとしてゐたり 同
 比叡といふ大きな露の中にあり 柏原 早川 水鳥
 風磨く高原の空星月夜 同
 眺望の多武峰さへ冬ぬくし 樺原 稲岡 長
 茶房出ですぐ短日の歩に馴染む 同
 やや寒きことが決断鈍らする 神戸 山田 弘子
 病よき人を秋野にいざなはん 同
 宗全籠大原盆に月の茶事 同 後藤 比奈夫
 茶釜にも月の光の届きぬし 同
 冬立てり夫婦互に気を配り 福岡 松尾 緑富
 旅先の急の寒さに戸惑ひぬ 同

被災の日近づく里の初紅葉 京都 安原 葉
 露寒やはや震災の五周年 同
 下萌えて大地に詩の満ちにけり 福山 竹下 陶子
 老の詩の遍歴已まず春さむし 同
 句を作り七十年の虫を聞く 徳島 上崎 暮潮
 人の世に避遁はあり大花野 同
 ばたばたとテントの張られ菊花展 たつの 浅井 青陽子
 水亭の深秋を訪ふバス二台 同
 荒行の阿闍梨やしなふ茸鍋 神戸 三村 純也
 菌山夜は満天の星覆ふ 同
 白々と碎け散る波月の浜 同 長山 あや
 初霜や野山のいのち沈み初む 同
 月育つ越後の旅と思ふさへ 金沢 藤浦 昭代
 晴れぬても遠流を偲ぶ露けさに 同
 秋晴の今日を賜るいのちかな 箕面 井上 浩一郎
 瀬の音のにはかに迫り初紅葉 同
 状態を桜紅葉としてをりぬ 大阪 薦 三郎
 もの言へば言はざるよりも秋深く 同

天地有情句評

汀子

深秋や虚子のひとことひとことに 東京 今井千鶴子

深秋に誘われるように思い出す虚子のひと言ひと事。

比叡といふ大きな露の中にあり 柏原 早川水鳥

露しとどに濡れた比叡山の中にいる実感。

茶房出てすぐ短日の歩に馴染む 榎原 稲岡 長

茶房でゆっくりした時間とは別の街の短日の歩みに乗って。

やや寒きことが決断鈍らする 神戸 山田弘子

やや寒いことが精神的な決断を鈍らせたと気づいた作者。

茶釜にも月の光の届きぬし 神戸 後藤比奈夫

月の光の中に静に進んで行く茶事の一駒。(以下略)

石路の花思ひ年尾忌思ひ病む 熱海 嶋田 一步

年尾忌の頃咲く石路の花に思いを重ねる作者。

教会のステンドグラス秋日濃し 島原 平尾圭太

教会のステンドグラスを通して知る秋の日の力。

虚子踏みし足跡辿り山の秋 東京 稲畑廣太郎

虚子の曾遊地を訪ねた作者の身内としての感概。